

# 民報 あばしり

No. 956

2014・2・9

発行所

日本共産党  
網走市委員会  
網走市北八西三  
四三二・四四五八  
F 四三二・四四五七

## 2014年新春のつどい 森つねとさん（国政相談室長）を迎え 地方選挙の躍進を誓おう！

日本共産党網走市委員会と網走市連合後援会が2日、「新春のつどい」を開催しました。  
松浦敏司市委員長が主催者挨拶を行い、次に飯田敏勝市議団長が、この間の市議会報告を行いました。  
続いて、党道委員会の森英士（つねと）国政相談室長が、あいさつで「昨年の参議院選挙では皆さんの大きなご支援のお陰で改選3議席から8議席に躍進させていただき、非改選と合わせて11議席で議案提案権を得ました。」



今や全国で日本共産党の存在感が増しています。  
今、日本共産党だけが国民の声を政治に届けています。

秘密保護法が強行採決された昨年の臨時国会の参院本会議では、日本共産党が唯一反対討論に立ち、まさに「自共対決」となっていました。

私は、その時、札幌の大通り公園で集会とデモ行進をしていました。私は悔しさと怒りの涙でプラカードの字が歪んで見えました。その時、沿道に3人の若者がいっしょにコールをしていました。その表情は、力強く、明るく……ここに未来があると

思いました。とのべ、若者の現状、国民の生活のこと、原発のことを語り、最後に「私はここに入党申込書を持ってきています。ここに参加されている後援会の方々へ、ぜひ日本共産党へ入党していただきたい」と訴えました。

そのあと、参加者はピアノ演奏、詩吟を聞き、後援会の健康体操をやり、うたごえで全員歌い、恒例のジャンケン大会とビンゴゲームで盛り上がりしました。

閉会のあいさつは、26回党大会へ参加した菊地宏さんから感動のエピソードを交え、来年の「地方選挙の躍進」を誓い合いました。

## いよいよ東奔西走

先の日曜日は朝から慌ただしく始まりまし。朝5時半起床、準備をして7時集合の今季一番の寒さの大曲スケートリンクに向かいました。第34回目の

小学生スケート大会です。五輪選手を生んだ歴史ある大会もわずか12人の参加で寂しい限りです。全国大会での優勝者を出した全盛期には少年団だけでも2000人を擁し、この大会が朝早くから夕方までかかったことを思い出しました。スケート離れの原因は様々ですが、学校体育での取り上げ方と学校リンクが減ると同時に冬季間の基礎体力をスケートかスキーでつくるという体力向上意識が変化していることも関係しているのではないのでしょうか。大会終了と同時に急いで着替え、元議員の叙勲祝賀会へ直行し、挨拶セレモニー後の祝宴もそこそこ、エコーセンターで昨夏の参院選で健闘した「森つねと」さんを迎えての「新春のつどい」に参加し、市内全域から参加した後援会の皆さんと歓談しました。夜は森さんが泊まったので議員団との会食が、私の携帯忘れから、合流が大幅に遅れるハプニングでした。年を感じる久しぶりの東奔西走でした。

## 松浦 奮戦メモ

歴代の内閣総理大臣は、「憲法上、集団的自衛権の行使はできない」と言明してきました。ところが安倍総理大臣は、法の番人である内閣法制局長官を「集団的自衛権行使ができる」と主張する人物に代えて、今国会で行使できるように解釈する構えです。

いくら国会で数の力をもっているからと、力づくで日本を「戦争しない国から戦争ができる国にする」など絶対にしてはなりません。ところで、安倍政権は昨年、憲法25条を解釈改憲して、生活保護費の生活扶助費を削りました。憲法25条（生存権、国の社会的使命）①すべての国民は、健康で文化的な最低限の生活を営む権利を有する。②国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上に努めなければならない。と書いています。

安倍政権は、この憲法25条を無視して勝手な解釈で生活扶助費を減し、今年も来年も同様に削減します。介護保険も狙われていますが、断固として反対しましょう。

## 流水

昨年未、先輩から手紙とともに「秘密保護法と友の生涯」と題した投稿記事が届いた。以下記事の内容▼秘密保護法、この重い言葉

を耳にした時、友人（映子さん）の顔が脳裏に浮かび心が沈んだ。両親と死別し祖父祖母のものとひきとられていた色白の美少女、おとなしく無口でどこか寂しげな彼女だったが気が合って親交は深まった。でもいつも伏目勝ち、面白い話をしていても声を出して笑わなかった▼彼女は亡くなった両親の話の一度も口にしなかった、両親は東京大空襲で犠牲になったのだからと思いで私も触れなかった。しかし、どこからともなく耳にしたのは驚くべき事実だった。大企業の会社員だった父親にスパイ嫌疑がかかり彼女の登校中に幼い弟妹を道連れに夫婦で一家心中をしたのだという▼どんな理由で嫌疑を受けたのか定かでないが逃げる術もなく追い詰められ、長女で女学生になっていた映子さんに生を託し無念の死を遂げたのであろう。彼女は深い悲しみと心の傷を抱え敗戦を迎えた▼重圧を解かれ若い人たちは自由を謳歌したが、映子さんはひっそりと生きていた。美しい人だったので縁談もいくつあったが結婚しなかった。家にこもり独身のまま三十代の若さで生涯を閉じた。何も言わず不幸な人生を送った映子さんに代わり声を大にして叫びたい「保護法は廃止せよ」と▼先輩は国民の目、口、耳を塞ぎ戦争できる国に作り変えようとする安倍内閣が法案を可決した時、何かをしなくてはという思いにかられ地方紙二社に投稿したのだった▼廃案を求める怒りの声は今も日々増している。(U)